

であった。頭位変換腕偏倚試験は、BPPVのスクリーニング及び治療効果判定の検査として有用であると思われた。

7. Fluvastatinによる著明な四肢・体幹の筋萎縮を呈した壊死性筋症の1例

福島剛志, 南雲清美, 平賀陽之
 榊原優美, 小島重幸 (松戸市立)
 宗像 紳 (千大)
 師尾 郁 (松戸神経内科)

症例は73歳女性。H13年5月より fluvastatin 内服、6月にCK4764IU/Lと上昇し、薬物中止したがその後四肢・体幹の筋力低下が進行し、CKの高値が続くため、当科入院した。筋生検で、筋の壊死再生像を認めた。電解質・腎機能障害はなく、症状進行するため、ステロイドパルス療法を施行し、症状の改善がみられたが、四肢・体幹の筋萎縮が進行した。本例では薬物中止後も、筋症状が進行するなど特異な病態が考えられた。(206)

8. Ear wiggling tics (VTR 供覧)

高谷美成, 三澤園子, 高橋宏和
 (下都賀総合)

器質的異常を認めない38歳男性。心因性の要素の強い緊張型頭痛とともに、耳介および頭皮に約2Hzの準律動的な不随意運動が観察された。ストレスにより増強し、随意的に短時間止めることが出来る、暗算負荷で軽減するなどチックの性質を有していた。随意的に耳を動かすことはできなかった。精神科的には神経症圏に属し、各種治療に抵抗した。チックは顔面に好発するが耳介にみられた報告はほとんどなく、希有な症例と考えられた。

9. 難聴、小脳性運動失調、びっくり眼、若年性白内障、痴呆をみとめミトコンドリア脳筋症の疑われた1例

和田 猛, 小松幹一郎, 宗像 紳
 新井公人, 福武敏夫 (千大)
 平野成樹, 今井尚志
 (国療千葉東)

30歳代に発症し、緩徐進行性の小脳性運動失調、両側感音性難聴、びっくり眼、若年性白内障、痴呆を呈し、病理診断の結果、RRF、チトクロームCオキシダーゼ活性の欠損した筋線維をみとめ、ミトコンドリア脳筋症と診断された48歳女性例を報告した。ミトコンドリア脳筋症には種々の臨床的多型性が見られるが、白内障および、びっくり眼を認めたことが本例の特徴で

あった。

10. 半側性に大脳半球浮腫を呈した肝性脳症の1例

石川千恵子, 吉川由利子, 高間淳子
 片山 薫 (成田赤十字)

症例は意識障害、けいれん、および左片麻痺が出現した51歳男性。画像上右半側性の大脳半球浮腫をみとめた。慢性アルコール性肝炎急性増悪で肝不全を伴っており、急性肝性脳症として治療をおこなった。肝機能の改善とともに症状および脳浮腫は改善した。肝性脳症における半側性大脳半球浮腫の報告は無く、貴重な症例と考え病態機序に関する考察を加えて報告する。

11. 多弁、異常行動、健忘を主徴とする Flumazenil 反応性脳症

中田美保, 高木健治, 下江 豊
 (鹿島労災)

約1週間の周期で多弁、構音障害、行動異常、歩行障害、傾眠～就眠を約2日間生じる60歳女性。Flumazenil 静注で一時的に症状が改善する。症状出現時の脳波では、14～15Hzの紡錘波に加え、18～19Hz以上の速波が多量に認められた。症状出現の機序として、代謝異常による内因性ベンゾジアゼピン様物質 Endoepine の蓄積が関与している可能性を考えた。

12. 多発性脳病変を有し脳生検を要した脳炎の1例

金坂俊秀, 児山 遊, 松田信二
 本間甲一
 (千葉県循環器病センター)

症例は頭痛、発熱、髄液細胞増多より髄膜炎と診断され、意識障害が現れた29歳男性。抗生物質、アシクロビル投与、ステロイドパルス、IVIgを行うも意識障害は増悪し、脳MRIでは脳幹部中心の結節性病変を多数認め、急速に拡大し大脳実質にも現れた。有意な検査所見無く診断確定のため脳生検が行われ非特異的炎症所見を認めた。フルコナゾール800mg/日を投与し症状、MRI所見は劇的に改善し真菌性脳炎が考えられた。

13. 海綿静脈洞内に膿瘍と巨大動脈瘤を認めた髄膜脳炎の1症例

大塚忠典, 小松幹一郎, 内山智之
 榊原隆次, 服部孝道 (千大)
 和田政則, 山上岩男
 (同・脳外科)

61歳女性。発熱、頭痛に続き、左Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ脳神経麻痺が出現した。海綿静脈洞内に、MRIで、当初